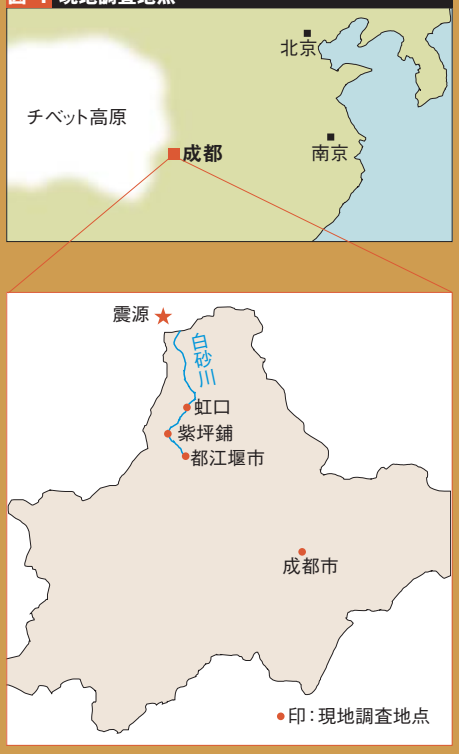
海外事情

中・日地震防災学術シンポジウムに出席して

池谷 浩
いけや ひろし
（財）砂防・地すべり技術センター理事長

図-1 現地調査地点



開会式のようす

はじめに

2008年10月8日～12日、中国成都市で標記のシンポジウムが開催された。主催は中国側が中国科学院国際合作局、日本側は(独)防災科学技術研究所と（独)日本学術振興会であり、中国科学院と日本の文部科学省が後援している。

「災害軽減の知恵を集めて、あらたに地域創りを目指す」と副題をつけたように、2008年ともに大きな地震災害を被った中国と日本が、学術的見地から地震と防災について討論しようとしたものである。

筆者は本シンポジウムの基調講演者として成都へ行ってきたので、その概要を紹介するものである。

1.会議のための科学委員会と組織委員会

今回の会議が中・日両国の地震と防災分野でのハイレベルのシンポジウムであることから、プログラム等を審議する科学委員会表-1とシンポジウムの運営・実行する組織委員会とを設置した。組織委員会は中国科学院資源環境科学与技術局　常旭副局長と文部科学省研究開発局　増子宏地震・防災研究課長が主席となった。また具体的なことは会議事務局を設置、組織委員会の委員を兼ねる成都山地災害与環境研究所　欧国強教授と防災科学技術研究所　関口宏二課長が担当として実行にあたった。

表-1 科学委員会のメンバー

主席		王　思敬	中国工程院院士、中国科学院地質与地球物理研究所教授
		岡田　義光	防災科学技術研究所理事長
副主席		傳　伯杰	中国科学院資源環境科学与技術局長、教授
		池谷　浩	(財)砂防・地すべり技術センター理事長
委員	中国側	陳　運泰 謝　和平 他7名	中国科学院院士、中国地震局地球物理研究所教授 中国工程院院士、四川大学校長、教授
	日本側	平田　直 水山　高久 他7名	東京大学地震研究所教授、副所長 京都大学大学院農学研究科教授、砂防学会長

2.現地調査

シンポジウムに先がけて、10月9日に汶川地震の災害現地調査が実施された。当初は震源地の映秀に行く予定であったが、数日前に余震があり途中の道路が通行止めとなったため、急遽調査地変更となり、都江堰、虹口、白沙河流域および紫坪鋪ダムに行くことになった図-1。

汶川地震の災害現地には多くの方が行ってその報告を書かれているので、本文では白沙河支川の土石流災害を主に紹介する。

成都市から高速道で都江堰市へ行き、その後地震で破壊され復旧工事中の岷江支川白沙河沿いの道路を通って虹口深渓淘まで行った。白沙河沿いの斜面では大小数多くの崩壊が見られた。途中白沙河支川で土石流により人家が数軒破壊されている現場に寄った。

土石流は水源山腹部の崩壊(高さ約100m、幅約250m、目視)を起源とする泥流と、後続流による花崗岩の砂礫の流れからなり、先端部により破壊された家の残された壁には、泥水の痕跡が見られた写真-1。そして、家は後続流による砂礫に埋まっていた。

虹口深渓淘では、約4mの落差ができた長さ約2kmの地震断層を見ることができた。我が国では濃尾地震による断層崖が有名であるが、目前に断層崖を見ても、これが地震でつい最近に形成された地形とはどうしても思えない、そんな気持ちで地震の営力の大きさを感じていた。

虹口～都江堰間では多くの仮設住宅を見た。一見我が国の仮設住宅によく似ていた。また少し山間部に入ったところでは、仮設住宅に代わって緑色の迷彩色のテントを見た。話によると、仮設住宅の使用期間は3年、入所から3ヶ月は1日10元(日本円で約160円)の手当が出ていたが、現在はすでに切れているとのことであった。

これらの被災状況の他、落石による家屋破壊や崩土による道路、橋梁の破壊など広域にわたって数多くの被害が発生している状況を視察することができた。

3．シンポジウム

中国科学院資源環境科学与技術局　常旭副局長の開会挨拶にはじまった開会式は、中国科学院国際合作局邱华盛副局長、文部科学省増子宏地震防災研究課長らの挨拶ののち、出席者全員での記念写真撮影が行われた。

10月10日午前8時50分からはシンポジウムの基調講演3題が発表された。(独)防災科学技術研究所　岡田義光理事長、中国科学院地質与地球物理研究所　王思敬教授に続いて筆者が「日本における天然ダムの形成とその対策」と題して講演した。

茶休の後、4つのテーマに分けられたシンポジウムが始まった。

写真-1 土石流で破壊された人家。人物は小長井東大教授

第1部門は「地震と防災」、第2部門は「地震のメカニズムと予報」、第3部門は「地震による二次災害のメカニズムとその防災技術」、第4部門は「地震災害の応急対策と震後の復旧・復興」とに分けられ、日本からの10編を含め計23編の論文が発表された。二日間にわたるシンポジウムは、それぞれすばらしい発表と熱心な質疑と討論により時間がオーバーするほどであった。

発表論文には興味深いものが多かったが、特にシンポジウム最後の発表となった成都山地災害与環境研究所の鄧偉所長による「震後の復興と山地の発展」と題した論文は中国における山地部の未来発展戦略について論じたもので、生態と人間居住区域、インフラ建設と安全保障、教育など7つの戦略をベースにした幅広い防災と地域づくり構想が述べられた。これらが具体的に実現することを望んでいるところである。

おわりに

今回の学術会議は日本からの20名の出席者を含め、約100名の研究者が参加して、短い日程のなかで災害現地調査とシンポジウムが実施された。夕食後は新聞記者との懇談会や、中国側との打ち合わせに時間が費やされて、結局成都の街を見物する時間も全くない状況であった。唯一のフリータイムであった帰国日の午前中には、山地災害与環境研究所に行き、砂防学会と研究所との共同研究について調印をしてきたところである。

多忙な旅ではあったが、二十数年前に当時の成都地理研究所の招待で訪れた成都を想い出しながら、当時からの旧友と再会できたことがなによりもすばらしい思い出となった。

末筆ながら今回のシンポジウムに声をかけていただいた文部科学省、(独)防災科学技術研究所の関係諸氏に感謝申し上げるとともに、現地でシンポジウム開催・実行にご苦労された欧国強教授に心より敬意を表するしだいである。